

## にいがた教育フォーラム 2017 in July

兵藤 清一

7月22日(土)、新潟大学教育学部において、新潟の教育についてともに考える「にいがた教育フォーラム 2017 in July」を開催した。今回は、「社会に開かれた教育課程の実現に向けて—新学習指導要領の目指すべき理念について語り合おう—」をテーマに、開会セレモニー、シンポジウム、ラウンドテーブルの流れで進められ、県内外の教職員、大学教員、教育委員会指導主事、一般市民の方等、120人の参加を得て活発な議論が展開された。

### 【にいがた教育フォーラム 2017 in July プログラム】

13:20～13:30	開会セレモニー
13:30～15:00	シンポジウム
15:20～16:50	ラウンドテーブル

#### 1. 開会セレモニーの概要

開会の挨拶で、高橋姿新潟大学学長より、「大学教育に携わる一人一人が、大学での学びを社会に開かれたものにしていくこと、社会のニーズに応え貢献できる人材を育成しようという気持ちを強く持つことが、教職大学院のみならず、本学の教員養成課程全体のパワーアップにつながる」との言葉があり、小中学校の教育現場だけでなく、大学教育にも当てはまる今日的な課題を、参加された方々と一緒に考えていくことが宣言された。

続いて、小久保美子教育実践開発専攻長より、昨年度の「中間報告会」という名称から、今年度、「教育フォーラム」に改名した理由について、教職大学院の設置理念に基づき、教職大学院での学びを学校現場の先生方をはじめ、関係の皆様を開いて、新潟県、新潟市の明日からの教育に貢献していくという趣旨が述べられた。さらに、本フォーラムの場が年齢・役割・立場を越えて本当の思いや悩み、考えを語り合い、参加された皆様にとって実りある場となるよう努めていくことが述べられた。

## 2. シンポジウムの概要

「社会に開かれた教育課程の実現に向けて一新学習指導要領の目指す理念について語り合おう」をテーマに、教職大学院からの話題提供、シンポジストからの話題提供、シンポジスト同士の意見交換及び質疑応答、フロアとの意見交換及び質疑応答の流れで行った。

主な内容は以下のとおりである。

### 1) 教職大学院からの話題提供

(1) 兵藤 清一 (新潟大学教職大学院准教授)

視点1：なぜ「社会に開かれた教育課程」が求められているのか

今回の学習指導要領改訂に関わる中央教育審議会答申(2016)は、2030年以降の社会を見据えて、学校教育が果たすべき役割を示そうとしている。その中で、我が国は、急激な社会の変化への対応が喫緊の課題となっている。このような中で、学校は社会の変化に目を向け、その変化を柔軟に受け止め教育課程を介して社会(地域)とつながり、子どもたちに未来(持続可能な社会)を創り出す力(資質・能力)を育成することが求められている。そのために、「社会に開かれた教育課程」が、目指すべき理念として位置付けられた。

視点2：どのように「社会に開かれた教育課程」を実現していくのか

上記の答申では、実現に向けた体系的な取組の視点として、「社会(地域)との目標の共有化」、「求められる(育成を目指す)資質・能力の明確化とその育成」、「地域の人的・物的資源の活用及び社会教育との連携」の3つが示された。学校では、これらの視点から、その実態に応じて様々な取組を工夫していくことが大切である。その際、コミュニティ・スクール、地域学校協働本部、チーム学校等のキーワードが示された「学校と地域の一体改革」に関する3答申(2015)やそれらの内容の具体化を強力に推進するための「次世代の学校・地域」創生プラン等を踏まえて、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた方策を考えていくことが重要になってくる。

### 2) シンポジストからの話題提供(具体的な実践や取組等)

(1) 小見まいこ様(NPO法人みらいず works 代表理事)

学校支援の中で、「社会に開かれた教育課程をつくるのに正解はない」と実感している。その学校の子どもたちや地域の課題に応じて、教育課程は違うからである。重要な視点は「自分ごと化」だと考えている。関わる一人一人が未来を見通した上で子どもたちを取り巻く課題を自分のこととして捉え、目の前の子どもたちに必要な

学びをカリキュラムとしてつくるということである。そのためには、熟議を積み重ね、①目的と目標を丁寧に共有すること、②地域や子どもの課題を正確に捉えて分かち合うこと、③ふりかえり学び続けること、が不可欠である。オンリーワンの教育課程づくりは、子どもたちの成長だけでなく、地域の活性化にもつながる大仕事である。ぜひいろいろな方を巻き込みながら「みんなで」つくるプロセスを大切にしていきたい。

### (2) 田邊 裕一様（新潟市立亀田小学校長）

これからは「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し地域と社会、学校とで未来を見据えた取組を進めなければならない。しかし、学校の目指す方向性と地域の目指す方向性のベクトルを合わせるためには工夫が必要である。亀田小では、校区中心部の人口減による商店街等の衰退が懸念され、学校として何とか活性化を目指せないかと考えた。学校が目指す子どもの将来像を、「地域の伝統や文化をしっかりと学び、亀田の良さを存分に知る。そして、亀田の人々の生き方に共感し亀田の町を愛する子ども」とし、これを地域と共有するため「亀田の子どもを語る会」を開催し、地域や保護者の方々と共に方向性を共有した。さらに、この組織を「亀っ子応援隊」に改編し、総合的な学習や生活科における地域の学びの充実に資するため、授業計画作成段階から助言をいただけるようにした。

### (3) 山岸 則子様（地域教育コーディネーター）

地域教育コーディネーターの立場から、学校の教育活動において地域資源を活用した取組の具体的事例と効果を紹介した。小学校では、体験型安全教室に不審者役として参加した地域住民や保護者の危機意識が高まり、子どもたちを守る環境整備への深い学びにつながっている。また、中学校では学力向上という学校の課題解決に向け、地域の人的資源を活用した「うちの塾」やそこから派生した地域の「学習サポート塾」へと活動が広がっている。

このように社会に開かれた教育課程を実現するには、学校はもちろんのこと、地域や保護者の理解がどこまで深められるかが鍵になると感じている。これからますます多様化していく社会を生き抜く力、地域を愛する心を持った子どもたちを育てるためには、学校と地域とがチームとなり、それぞれが持つ課題や思いを共有していく必要がある。そのために、これからも学校の思い、地域の思いをつなげる役割を担っていきたい。

### 3. ラウンドテーブルの概要

参加された方が、以下の7つのテーマの中から1つを選び、類似の興味・関心に基づいて、5人以下の小グループをつくり、机を囲んで（ラウンドテーブル）、年齢・役割・立場を越えて本当の思いや悩み、考えを語り合う場を提供した。

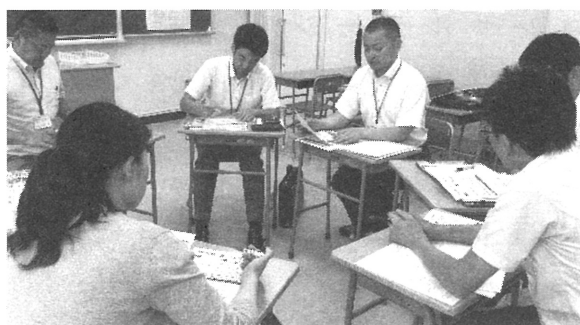
自己紹介から始まり、各グループにいる院生がテーマについて、現在取り組んだり学んだりしている研究内容について話題提供し、それをきっかけに参加者それぞれの実践や悩みを語り合い、それらを傾聴し合いながら、ファシリテーターを中心にテーマについて、考えを広げたり、深めたりする場となった。

会場	カテゴリー	テーマ
第1会場	教育課程編成	「これからの教育課程」の在り方
第2会場	授業づくり	教科の本質に迫る学習課題の探究
第3会場	教育相談	いじめ・不登校のサイン見逃しが繰り返される背景
	特別支援	学習参加が難しい子どもへの支援
第4会場	学年・学級経営	教師と子ども、子どもと子どもの関係づくり
第5会場	学校経営	教師の協働性を高めるチーム学校の体制づくり
第6会場	グローバル教育	グローバル化の進展に対応した教育活動
第7会場	特設	家庭・地域と子どもの育ち

< シンポジウムの様子 >



< ラウンドテーブルの様子 >



< 新潟日報（2017年7月25日）の記事 >

